

小学校教師の怒り経験に関する探索的研究

藤井義久

An Exploratory Study on Anger in Elementary School Teachers

Yoshihisa Fujii

要 旨

本研究の目的は、小学校教師版怒り尺度および小学校教師版怒り対処尺度を開発し、それらの尺度を用いて、小学校教師の怒り水準と怒り対処行動との関係について検討することである。研究Ⅰでは、小学校教師392名（男性141名、女性251名）を対象にして、小学校教師版怒り尺度を開発し、その信頼性、妥当性について検討した。因子分析の結果、小学校教師版怒り尺度は、30項目3因子構造（「児童の言動」因子、「同僚や保護者の言動」因子、「多忙な仕事」因子）であることが判明した。また、小学校教師版怒り尺度は、高い信頼性、妥当性を示した。研究Ⅱでは、研究Ⅰと同一の小学校教師を対象にして、小学校教師版怒り対処尺度を開発し、怒り水準と怒り対処行動との関係について分析した。因子分析の結果、小学校教師版怒り対処尺度は、24項目6因子構造（「相談」因子、「児童への攻撃」因子、「リラクゼーション」因子、「抑圧」因子、「家族への攻撃」因子、「自力問題解決」因子）であることが判明した。また、小学校教師版怒り対処尺度は、高い信頼性、妥当性を示した。そこで、小学校教師の怒り水準と怒り対処行動との関係について検討するために分散分析を行った。その結果、男女とも、怒り水準が高くなればなるほど、小学校教師は、怒り喚起場面において攻撃行動を取る傾向がより強くなることがわかった。

キーワード：小学校教師、怒り、怒り対処行動、攻撃行動

最近、いじめ、不登校、学級崩壊など、学校現場が抱える問題はますます深刻化してきており、対応に苦慮している教師も少なくない。文部科学省の調査（2000）によると、そのようなストレスがかかりやすい職場環境が原因して精神疾患にかかって休職している教職員の数は、ここ10年で約2倍になり、年々急増している現状にある¹⁾。

教師ストレス研究は、西坂（2003）も述べているように、1970年後半からイギリスで始まり、バーンアウト研究とともに盛んに行われるようになってきた²⁾。新井（1999）は、バーンアウトを「人を援助するという職業上の役割を遂行する過程でよく見られる、情緒的消耗感、脱人格化、個人的達成の低下」と定義し、教師のストレスとバーンアウトには密接な関連があると述べている³⁾。つまり、教師自身、ストレスが高まってくると、

職場において様々な問題が生じるようになり、職場不適応を起こし、最終的に休職や離職を余儀なくされるケースも少なくない。

このような教師のメンタルヘルスの問題は、単に教師自身の問題に留まらず、そうした教師と常に接している児童生徒にも非常に大きな影響を与えていることを十分認識しておくことが必要である。例えば、嶋田・戸ヶ崎・坂野（1994）は、教師のストレスが高いことが児童生徒に多くの悪影響を及ぼしていることを明らかにしている⁴⁾。

さて、今津（1999）は、そのような児童生徒に影響を及ぼしていると考えられる教師ストレスを「教師が仕事の中で抱く、怒りや緊張、葛藤、不安、抑鬱といった不愉快な感情」と定義している⁵⁾。つまり、教師ストレスは、様々な感情が含まれた複合的な概念であると考えられる。従って、教師

ストレスを測定しようとする場合、一般的なストレス傾向を測定すると同時に、教師ストレスを構成している不愉快な感情の程度を個々に測定していく必要もあると考えられる。そういったことから、嶋田・戸ヶ崎・坂野(1994)は、ストレス反応を、「抑うつ・不安反応」、「不機嫌・怒り反応」、「無気力反応」、「身体的反応」という4つの視点から多角的に捉えることの必要性を指摘している⁴⁾。

さて、最近、我が国においては児童生徒のキレやすさの問題ばかり注目されているが、キレやすい教師の問題も教師ストレスの増加とともに深刻化してきていることを忘れてはならない。文部科学省(2003)の調査によると、平成12年度、体罰を理由に懲戒処分を受けた公立学校教員は全国で428名にのぼっており⁵⁾、その数は年々増加している傾向が見られることから、児童生徒に大きな影響を及ぼしていると考えられる教師の怒り研究を早急に行っていく必要があると言える。

そこで、本研究においては、小学校教師を対象にして、教師の怒り感情及び怒り喚起場面における対処行動について分析することにした。このような教師の怒りに関する実証的研究は今まで行われてこなかったが、藤井(2001)は一般大学生を対象にして、怒り喚起場面における対処行動様式は、大きく「リラクゼーション」、「抑圧」、「相談」、「問題行動」という4つに分かれることを明らかにしている⁷⁾。また、Band and Weisz(1988)によると、ストレス場面における対処行動は、大きく問題解決を図ることを目的とする「問題焦点型対処行動」と、気分を落ち着かせることを目的とする「情動焦点型対処行動」に分かれることを明らかにしている⁸⁾。そして、対処行動様式には男女差があり、女子は男子よりもソーシャルサポートを多く利用する傾向があるのに対し、男子は攻撃行動を取る傾向が強いことも明らかになっている^{9) 10)}。ただ、教師の怒り対処行動に関する研究は、今まで行われてこなかっただけに、どういふ結果が出るか大変興味深いところである。

研究 I

予備調査

目的

小学校教師版怒り尺度を開発するために、小学

校教師の怒り経験に関する項目を収集する。

方法

1. 調査対象

教員研修会に参加した小学校教師48名(男性20名、女性28名)を対象に調査を行った。なお、調査対象の小学校教師の平均年齢は、42.7歳であった。

2. 手続き

前述の小学校教師に対して、これまで学校現場において自分が経験した怒り経験について、自由記述方式で調査を行った。なお、調査はプライバシーを考慮して無記名で行い、調査に協力したくない場合には調査に協力しなくて構わない旨、教師に伝えた。

結果

自由記述調査によって収集された小学校教師の怒り経験項目をKJ法によって整理、分類した結果、小学校教師の怒り経験に関する30項目を選定した。そして、それらの項目内容がそれぞれ現在の学校現場を反映したものになっているか、現職の小学校校長3名に見てもらい、一部文章の修正を行った。

本調査

目的

小学校教師版怒り尺度を開発し、その信頼性および妥当性を検証する。併せて、性差および年齢差の検討も行う。

方法

1. 調査対象

岩手県内の公立小学校の教師500名を対象に郵送法により調査を実施した。その結果、392名(男性141名、女性251名、回収率=74.4%)の有効回答を得た。なお、調査対象の小学校教師の平均年齢は、43.5歳であった。

2. 調査用紙

(1) 小学校教師の属性

性別, 年齢について尋ねた。

(2) 小学校教師の怒り経験

前述の予備調査によって収集, 選定された30項目からなる質問紙を用いた。なお, 回答方式は, 4件法(全くない-よくある)である。

3. 手続き

プライバシーを考慮して, 無記名式で調査を行った。なお, 調査実施に当たっては, 本人に職務上不利を被ることのように, 直接同封の返信用封筒に入れて調査用紙を送り返す方式とするとともに, 調査対象者の意志を最大限尊重し, 調査に協力したくない場合や特定の質問に答えたくない場合には, 回答しなくてもよい旨, 伝えた。

結果および考察

1. 項目分析

まず, それぞれの回答結果に, 0点(全くない)から3点(よくある)という得点を与えた。視察したところ, 明らかに得点分布に偏りのある項目は存在しなかった。次に, 調査対象者の中から, 総得点の上位25%と下位25%に含まれる者を抽出し, それぞれの項目ごとに, 総得点上位群の項目得点が総得点下位群よりも有意に高いかどうかを検証するために, T検定によるGP分析を行った。その結果, すべての項目に有意差が認められたので, 30項目すべてを以下の分析対象とすることに決めた。

2. 因子分析

小学校教師の怒り経験に関する項目について, 主因子法・バリマックス回転による探索的因子分析を行った結果, 固有値の変化及び解釈可能性から3因子解が最適であると判断された。なお因子負荷量が0.40未満および2重負荷の項目は見られず, 削除すべき項目は存在しなかったため, 最終的に3因子30項目を小学校教師版怒り尺度の項目とすることに決めた。

抽出された因子とそれらに含まれる因子および共通性をまとめたものがTable1である。まず第1因子は, 「教室がうるさいとつい大声で児

童を怒鳴りたくなる」, 「掃除をまじめにしている児童を見るとムカムカする」といった, 児童の言動に対する小学校教師の怒りに関する項目の因子負荷が高いことから, 「児童の言動」と命名した。また, 第2因子は, 「同僚が自分の指導法を批判するとムカムカする」, 「保護者が自分のことを批判するとカッとなる」といった, 同僚や保護者の言動に対する小学校教師の怒りに関する項目の因子負荷が高いことから, 「同僚や保護者の言動」と命名した。さらに, 第3因子は, 「仕事が多くて時間がないように感じる時, 頭にくる」, 「学校行事の準備に追われる時, いらいらする」といった, 多忙な仕事に対する小学校教師の怒りに関する項目の因子負荷が高いことから, 「多忙な仕事」と命名した。

以上, 因子分析結果から, 小学校教師版怒り尺度は, 児童の言動に対する怒りに関する16項目, 同僚や保護者の言動に対する怒りに関する8項目, 多忙な仕事に対する怒りに関する6項目から構成されていることが明らかになった。

Table 1 小学校教師版怒り尺度の因子分析結果 (バリマックス回転)

項 目	M	SD	F1	F2	F3	共通性
I. 児童の言動						
教室がうるさいとつい大声で児童を怒鳴りたくなる.	1.03	0.76	.71	-.02	.24	.56
掃除をまじめにしていない児童を見るとムカムカする.	1.03	0.66	.70	.10	.17	.53
授業中, 思った通りに児童が動いてくれないと腹が立つ.	0.79	0.61	.70	.24	.10	.55
授業中, 騒ぐ児童を見るとひどく腹が立つ.	1.11	0.65	.69	.02	.21	.52
いくら注意してもきかない児童に対してカッとなる.	1.19	0.63	.69	.15	.07	.50
児童が自分に対して反抗的な態度を取るとカッとなる.	1.02	0.64	.64	.28	.08	.50
給食の準備がもたもたしているのを見るといらいらする.	0.91	0.64	.64	.21	.08	.45
クラブ活動中, ふざけている児童を見ると怒鳴りたくなる.	0.78	0.68	.62	.24	.12	.45
児童が学校の備品を壊したら無性に腹が立つ.	0.57	0.65	.56	.33	.00	.42
廊下を走っている児童を見ると大声で怒鳴りたくなる.	0.78	0.69	.56	.18	.11	.36
児童同士がけんかしているのを発見したら非常に腹が立つ.	0.70	0.63	.55	-.01	.21	.34
授業中, 質問しても答えない児童を見るとムカムカする.	0.71	0.61	.54	.23	.07	.30
授業中, 何度指導しても児童が理解しないといらいらする.	0.83	0.62	.48	.29	.25	.35
宿題を忘れた児童がいたら厳しく叱りたくなる.	0.67	0.65	.45	.27	-.06	.28
指導計画通りに授業が進まないで腹が立つ.	0.56	0.56	.45	.29	.28	.37
なかなか学習成果が上がらない児童に小言を言いたくなる.	0.55	0.57	.40	.21	.21	.30
II. 同僚・保護者の言動						
同僚が自分の指導法を批判するとムカムカする.	0.53	0.58	.16	.71	.15	.55
会議中, 自分の提案が受け入れてもらえないと腹が立つ.	0.48	0.59	.21	.70	.15	.55
一生懸命やっても同僚が評価してくれないと腹が立つ.	0.50	0.57	.09	.68	.15	.49
保護者が自分のことを批判するとカッとなる.	0.65	0.62	.32	.60	.24	.52
保護者をお願いしても聞き入れてもらえないとカッとなる.	0.56	0.62	.34	.56	.21	.48
職員室で冷たくされたり無視されたりすると腹が立つ.	0.57	0.66	.12	.54	.21	.35
会議中の同僚の発言にカッとなることがある.	0.29	0.47	.13	.53	.17	.33
保護者と話をしている、腹の立つことがある.	0.70	0.60	.28	.51	.17	.37
III. 多忙な仕事						
仕事が多くて時間がないように感じる時, 頭にくる.	1.17	0.84	.12	.17	.78	.66
学校行事の準備に追われる時, いらいらする.	0.94	0.71	.20	.16	.70	.56
仕事で夜遅くまで学校に居なければならない時, 腹が立つ.	0.78	0.76	.09	.28	.69	.56
会議が長引くと腹の立つことがある.	0.95	0.72	.14	.14	.52	.31
仕事を色々任せられると腹が立つ.	0.69	0.65	.06	.31	.51	.43
明日の学習指導案がなかなか書けないといらいらする.	0.72	0.68	.28	.21	.46	.25
因子寄与			9.46	2.37	1.42	

3. 信頼性の検討

内的整合性の検討 小学校教師版怒り尺度の各因子の内的整合性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、小学校教師版怒り尺度の各因子の α 係数は、「児童の言動」因子が.70, 「同僚や保護者の言動」因子が.85, 「多忙な仕事」因子が.83であり、各因子とも内的整合性の高いことが確認された。

折半法信頼性の検討 小学校教師版怒り尺度の折半法信頼性を検討するために、折半法信頼性係数を算出した。なお、折半法信頼性係数は、各因子ごとに奇偶法によりピアソンの積率相関係数を求め、その値をスピアマン・ブラウンの公式によって修正した値を用いることにした。その結果、小学校教師版怒り尺度の各因子の折半法信頼性係数は、「児童の言動」因子が.84, 「同僚や保護者の言動」因子が.75, 「多忙な仕事」因子が.73であり、各因子とも一定の信頼性が備わっていることが確認された。

4. 検証的因子分析による構成概念妥当性の検討

探索的因子分析結果をもとに想定された仮説モデルを検証するために、検証的因子分析を行

った。その結果、モデルが項目間の相関行列の全分散を説明する程度を表す適合度指標は、GFIが.92, AGFIが.90といずれも高い値を示した。このことから、小学校教師版怒り尺度の構成概念妥当性は認められた。

5. 年齢差・性差の検討

小学校教師の怒り水準の年齢差および性差を検討するために、二要因（年齢×性）の分散分析を行った。その結果をTable2に示す。なお、教師の年齢は、20歳代（76名）、30歳代（162名）、40歳代以上（154名）と3群に分けた。

まず、年齢については、「多忙な仕事」のみ主効果が認められた。そこで、Tukeyの多重比較を行った結果、40歳以上の教師は、20歳代、30歳代の教師に比べて有意に高い怒り得点を示した。また、性差については、「同僚や保護者の言動」、「多忙な仕事」および「全体」において、女性は男性に比べて有意に高い怒り得点を示した。つまり、一般的に見ると女性教員の方が男性教員よりも怒り水準が高いと言える。しかし、「児童の言動」においては、有意な交互作用が認められた。つまり、男性教員は、年齢が上がるにつれて児童の言動に対する怒り得点

Table2 小学校教師の怒り得点の年齢別・性別平均値と分散分析結果

年齢群	1(～29歳)		2(30～39歳)		3(40歳～)		分散分析		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	年齢差	性差	交互作用
人数	n=31	n=45	n=63	n=99	n=47	n=107	F 値	F 値	F 値
怒り得点									
児童の言動	14.42 (7.13)	11.36 (4.77)	12.33 (5.95)	13.35 (6.84)	12.26 (6.12)	14.55 (6.89)	1.19	1.21	4.03*
同僚や保護者の言動	3.13 (2.99)	3.58 (2.84)	3.75 (2.88)	3.96 (3.38)	4.70 (3.26)	5.20 (3.16)	0.88	9.45***	0.24 男<女
多忙な仕事	4.25 (2.89)	4.34 (2.96)	4.67 (2.71)	5.32 (2.54)	5.30 (3.44)	6.22 (2.89)	5.50* 1<3,2<3	9.13***	0.00 男<女
全体	21.80 (10.58)	19.28 (8.56)	20.75 (9.60)	22.64 (11.11)	22.26 (11.17)	25.97 (10.98)	2.49	5.72**	2.46 男<女

()は標準偏差 *p<.05,**p<.01,***p<.001

が低下する傾向に見られるのに対して、女性教員は逆に上昇するため、「児童の言動」においては有意な交互作用が認められたことは、大変興味深い結果と言える。なぜこのような結果になったかについては、今後さらに詳細に分析していく必要があると思われる。

研究Ⅱ

目的

小学校教師版怒り対処尺度を開発し、その信頼性および妥当性を検証する。併せて、小学校教師の怒り水準と怒り対処行動との関係について検討する。

方法

1. 調査対象

研究Ⅱは、研究Ⅰと同時に同一の小学校教師を対象に行った。

2. 調査内容

小学校教師版怒り対処行動尺度を作成するに当たり、一般大学生を対象として、藤井(2001)が開発した怒り対処尺度(4因子構造:リラクゼーション因子8項目;抑圧因子6項目;相談因子5項目;問題行動因子6項目)の中から小学校教師版怒り対処行動尺度としてふさわしい20項目を選んだ。さらに、小学校教師特有の対処行動項目として新たに10項目作成した。

そして、これら30項目を用いて、小学校教師版怒り対処尺度を作成した。なお、回答方式は、「全くない(1)」から「よくある(4)」の4件法を採用することに決めた。併せて、筆者が研究Ⅰで作成した「小学校教師版怒り尺度」を用いた。

3. 分析方法

小学校教師版怒り対処尺度の因子構造は、主因子法・バリマックス回転による探索的因子分析によって検討した。また、本尺度の信頼性については、内的整合性の指標であるクロンバックの α 係数を用いて検討した。さらに、本尺度の妥当性については、探索的因子分析結果およ

び検証的因子分析の回転後の因子パターンにより構成概念妥当性を検討した。なお、検証的因子分析におけるモデルの適合度指標には、GFIおよびAGFIを用いた。

結果および考察

1. 小学校教師における怒り対処行動の因子構造

小学校教師の怒り対処行動に関する30項目について、探索的因子分析を行った結果、固有値の変化および解釈可能性から、6因子解が妥当であると判断された。しかし、因子負荷量が0.40以下の項目や2重負荷のかかった項目が見られたので、それらを削除し、再度、同様な因子分析を行った。その結果、Table3に示されるように、6因子24項目が、小学校教師の怒り対処行動に関する項目として抽出された。

まず、第1因子は、「同僚に相談した」、「同僚に話を聞いてもらった」といった項目に高い因子負荷が見られたので、「相談」因子と命名した。第2因子は、「児童を厳しく叱った」、「厳しい口調で児童に語りかけた」といった項目に高い因子負荷が見られたので、「児童への攻撃」因子と命名した。第3因子は、「家で音楽を聴く」、「家に帰って、趣味に没頭した」といった項目に高い因子負荷が見られたので、「リラックス」因子と命名した。第4因子は、「腹の立ったことを忘れるように努めた」、「じっと我慢するように努めた」といった項目に高い因子負荷が見られたので、「抑圧」因子と命名した。第5因子は、「家族に怒りをぶつけた」、「家族に当たり散らした」といった項目に高い因子負荷が見られたので、「(自分の)家族への攻撃」因子と命名した。最後に、第6因子は、「問題解決方法について自分なりにじっくり考えた」、「問題が生じた原因について論理的に考えるように努めた」といった項目に高い因子負荷が見られたので、「自力問題解決」因子と命名した。

以上、探索的因子分析の結果、6つの下位尺度、計24項目から成る「小学校教師版怒り対処尺度」が生まれた。

Table 3 小学校版教師怒り対処尺度の因子分析結果 (バリマックス回転)

項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
I. 相談							
同僚に相談した.	.89	.05	.09	.03	.02	.05	.80
同僚に話を聞いてもらった.	.84	.06	.11	-.01	.15	.10	.76
同僚に助けを求めた.	.74	.02	.15	.13	.25	.11	.65
上司に話を聞いてもらった.	.60	.12	.06	-.04	-.07	.15	.41
II. 児童への攻撃							
児童を厳しく叱った.	.06	.86	.01	-.07	.07	.02	.75
厳しい口調で児童に語りかけた.	.12	.80	.06	.04	.09	-.04	.67
児童に対して大声で怒鳴った.	.01	.77	.08	.07	.09	-.07	.62
児童をにらみつけた.	.04	.76	-.03	-.01	.05	.03	.58
III. リラックス							
家で音楽を聴く.	.07	-.00	.70	-.02	-.06	.10	.51
家に帰って、趣味に没頭した.	-.03	.10	.69	.01	.06	.18	.52
家に帰って、ゆっくり風呂に入った.	.15	.01	.66	.12	.12	.04	.49
他のことに没頭して気を紛らわせるように努めた.	.04	-.06	.62	.27	.16	.09	.56
家に帰って、早く寝た.	.22	.05	.56	.27	.01	-.11	.45
IV. 抑圧							
腹の立ったことを忘れるように努めた.	.01	-.07	.22	.78	.09	.08	.68
じっと我慢するように努めた.	-.09	.08	.08	.78	.11	.22	.69
腹の立つ気持ちを何とか抑えるようにした.	.06	.12	-.01	.71	.03	.20	.57
気にしないようにした.	.14	-.14	.28	.51	-.22	-.00	.42
V. 家族への攻撃							
家族に怒りをぶつけた.	.00	.08	.01	.11	.85	-.04	.74
家族に対して当たり散らした.	-.02	.12	-.04	.06	.79	-.15	.67
家族に対して大声で怒鳴った.	.20	.02	.13	-.07	.59	.14	.43
家族と口論した.	.16	.12	.27	.00	.47	.05	.40
VI. 自力問題解決							
問題解決方法について自分なりにじっくり考えた.	.15	-.06	.07	.12	-.07	.85	.77
問題の原因について論理的に考えるように努めた.	.09	-.03	.04	.18	-.01	.84	.75
自分なりに様々な問題解決方法を試みた.	.22	.04	.27	.23	.07	.64	.59
因子寄与	2.68	2.68	2.53	2.36	2.15	2.10	

2. 小学校教師版怒り対処尺度の信頼性, 妥当性の検討

(1) 内的整合性の検討

小学校教師版怒り対処尺度の内的整合性を検討するために, クロンバックの α 係数を求めた. その結果, 小学校教師版怒り対処尺度の各因子の α 係数は, 「相談」因子が.70, 「児童への攻撃」因子が.74, 「リラックス」因子が.71, 「抑圧」因子が.70, 「家族への攻撃」因子が.71, 「自力問題解決」因子が.72と満足のいく値を得た. 以上の結果から, 本尺度には, ある程度の信頼性が存在していると判断された.

(2) 検証的因子分析による構成概念妥当性の検討

探索的因子分析結果をもとに想定された仮説モデルを検証するために, 検証的因子分析を行った. その結果, モデルが, 項目間の相関行列の全分散を説明する程度を示す適合度指標は, GFIが.93, AGFIが.92といずれも高い値を示した. このことから, 小学校教師版怒り対処尺度の構成概念妥当性は認められた.

3. 小学校教師の怒り水準と対処行動との関係

研究Iで, 小学校教師の怒り水準について検討した結果, 有意な性差が認められたため, 小学校教師の怒り水準と対処行動との関係について男女別に検討を行うことにした. まず, 小学校教師版怒り尺度によって算出される怒り得点によって, 調査対象者を3群に分けた. すなわち, 怒り得点が17点以下をL群, 18点から26点をM群, 27点以上をH群とした. そして, 男女別に, 小学校教師版怒り対処尺度の各下位尺度の得点について, 怒り水準段階(L群, M群, H群)を独立変数とする1要因分散分析を行った. Table4に, 怒り水準別の小学校教師版怒り対処尺度の平均値及び標準偏差を示す. 男性教師においては, 「児童への攻撃」および「家族への攻撃」において主効果が認められた(児童への攻撃: $F(2,110) = 3.09, p < 0.05$; 家族への攻撃: $F(2,110) = 3.78, p < 0.05$). そこで, Tukeyの多重比較を行った結果, 「児童への攻撃」, 「家族への攻撃」とも, 怒り水準H群の方がL群よりも5%水準で有意に高い対処得点を示した.

女性教師においても, 男性教師と同様に,

「児童への攻撃」および「家族への攻撃」において主効果が認められた(児童への攻撃: $F(2,201) = 14.78, p < 0.001$; 家族への攻撃: $F(2,201) = 5.66, p < 0.01$). そこで, Tukeyの多重比較を行った結果, 「児童への攻撃」, 「家族への攻撃」とも, 怒り水準H群の方がL群よりも5%水準で有意に高い対処得点を示した.

以上のことから, 小学校教師は, 性別に関係なく一般に, 怒り水準が高くなればなるほど, 児童や自分の家族に対する攻撃傾向が増大してくる傾向が明らかになった.

総合考察

研究Iで, 小学校教師版怒り尺度を作成し, 信頼性, 妥当性を検討した結果, 内的整合性, 折半法信頼性, 構成概念的妥当性が認められた. その結果, 小学校教師版怒り尺度は, 十分な信頼性と妥当性を有していることがわかった.

また, 探索的因子分析の結果, 小学校教師の怒りを生み出す原因は, 大きく「児童の言動」, 「保護者や同僚の言動」, 「多忙な仕事」に分かれることが判明した. これらの怒り因子は, 多くの教師ストレス研究^{11) 12) 13) 14)}によって明らかになった教師ストレス因子と, 言葉の表現は多少異なるもののほぼ一致している. 前に述べた, 今津(1999)の教師ストレスの定義⁹⁾からすると, 怒りはストレスの一構成要因と捉えることができることから, 研究Iで抽出された小学校教師の怒りに関する因子と, 多くの先行研究によって明らかになった教師ストレスに関する因子がほぼ一致したことは, 小学校教師版怒り尺度の妥当性を支持する結果と言える.

また, 小学校教師の怒り水準の年齢差および性差についても, 2要因分散分析(年齢×性)によって検討した結果, いくつかの主効果が認められた. まず, 年齢差については, 40歳代以上の小学校教師の方が30歳代以下の小学校教師に比べ, 多忙な仕事に対する怒り得点が有意に高いことが明らかになった. これは, ベテラン教師になるにつれて, 日々の学校教育に関わる仕事の他に, 教務主任や生徒指導主事など, 様々な学校経営に関わる仕事を任され, それに伴って怒り水準が高まってくると思われる. 一方, 性差については, 「同僚や保護者の言動」, 「多忙な仕事」および全

Table 4 小学校教師の怒り水準別の怒り対処得点の平均値および標準偏差

	怒り水準			主効果
	L群	M群	H群	
人数	37	44	32	
相談	5.14 (3.17)	4.61 (2.51)	5.38 (3.38)	0.65
男 児童への攻撃	1.49 (2.04)	1.93 (1.77)	2.75 (2.65)	3.09* (L群<H群)
リラックス	4.89 (1.76)	5.41 (3.27)	6.25 (3.20)	1.68
性 抑圧	4.70 (2.26)	4.86 (2.44)	5.59 (2.18)	1.44
家族への攻撃	1.38 (1.32)	1.72 (1.60)	2.50 (2.21)	3.78* (L群<H群)
自力問題解決	4.51 (2.26)	5.14 (1.85)	4.75 (2.05)	0.96
人数	72	61	71	
相談	5.43 (2.89)	6.57 (2.84)	5.85 (2.46)	2.93
女 児童への攻撃	0.86 (1.47)	1.89 (1.85)	2.49 (2.08)	14.78** (L群<H群)
リラックス	5.67 (3.17)	6.30 (3.34)	6.49 (3.22)	1.26
性 抑圧	5.51 (2.46)	5.80 (2.45)	6.24 (2.17)	1.71
家族への攻撃	2.46 (2.08)	3.44 (2.54)	3.69 (2.31)	3.78* (L群<H群)
自力問題解決	4.75 (2.39)	5.05 (1.93)	4.68 (1.89)	0.57

()内は標準偏差.
*p<.05, **P<.01

体において、女性教師の方が男性教師に比べ有意に怒り得点の高い傾向が明らかになった。すなわち、小学校教師の怒り水準は、全体的に女性教師の方が高いと言える。この結果は、まだまだ女性が家庭を持ちながら働くことの難しさを物語っていると見える。従って、国が率先して女性が働きやすい環境整備を図っていく必要があるように思われる。その一方で、児童の言動においては、男性教師の場合、年齢が上がるにつれて徐々に下がるのに対して、女性教師の場合、徐々に上昇するという逆の傾向を示した。なぜ男女によってこのような傾向の違いが見られたかについては、今後さらに様々な角度から詳細に検討していかねばならない課題であると考えられる。

研究Ⅱでは、小学校教師版怒り対処尺度を開発し、信頼性、妥当性を検討した結果、内的整合性および構成概念的妥当性が認められた。その結果、小学校教師版怒り対処尺度は、十分な信頼性、妥当性が備わっていることが明らかになった。

また、探索的因子分析の結果、小学校教師の怒り喚起場面における対処行動は、大きく「相談」、「児童への攻撃」、「リラクセス」、「抑圧」、「家族への攻撃」、「自力問題解決」という6つの様式に分かれることが判明した。そして、小学校教師の怒り水準が高くなればなるほど、男女とも児童や家族に対する攻撃行動が多くなることが明らかになった。これは、怒り水準が高まれば高まるほど、体罰を引き起こす危険性も高まることを裏付ける結果となった。

本研究によって「小学校教師版怒り尺度」および「小学校教師版怒り対処尺度」が開発されたことは、教師のメンタルヘルス対策に役立つばかりではなく、今後、教師の言動が児童生徒に及ぼす心理的影響を分析していくためにも非常に有益であると考えられる。今後は、さらに本尺度を用いて、教師の怒り発現メカニズムの解明及び教師の怒りが児童生徒の不応行動に及ぼす影響などについて研究していきたいと考えている。

[付記]

本研究は、平成16,17年度科学研究費（基盤研究C）「教師の怒りが児童生徒の不応行動に及ぼす影響」（研究代表者：藤井義久）の一部として実施した。

引用文献

- 1) 文部科学省：教育委員会月報，文部科学省教育助成局地方課,612,2000年.
- 2) 西坂小百合：我が国における教師ストレスの現状と課題 学校教育学研究論集,8,13-24,2003年.
- 3) 新井肇：教師崩壊 バーンアウト症候群克服のために すずさわ書房,1999年.
- 4) 嶋田洋徳・戸ヶ崎康子・坂野雄二：小学生用ストレス反応尺度の開発 健康心理学研究,7,46-58,1994年.
- 5) 今津孝次郎：変動社会の「教師教育」, 高校教育展望, 10月号, 56-59, 小学館,1999年.
- 6) 文部科学省：文部科学白書，財務省印刷局,63,2003年
- 7) 藤井義久：大学生の怒りとその対処行動に関する研究, 岩手県立大学看護学部紀要, 第3巻, 23-30,2001年.
- 8) Band,E. & Weisz,J.R. : How to feel better when it feels bad:Children's perspectives on coping with everyday stress. *Developmental Psychology*, 24,247-253,1988年.
- 9) Frydenberg,E., & Lewis,R. : How adolescents cope with different concerns:The development of the Adolescent Coping checklist (ACC), *Psychological Test Bulletin*,3,63-73,1990年.
- 10) Jose,P.,Cafasso,L.,& Anna,C. : Ethnic group differences in children's coping strategies *Sociological Studies of Children*,6,23-53,1994年.
- 11) Kyriacou,C & Sutcliffe,J :A model of teacher stress, *Educational Studies*,4,1-6,1978年.
- 12) Halpin,G.,Harris,K.R., & Halpin,G : Teacher stress as related to locus of control,sex and age. *Journal of Experimental Education*, 53,136-140,1985年.
- 13) Kelly,A.L. & Berrthelsen,D.C. : Preschool teachers' experiences of stress,*Teaching and Teacher Education*, 11,345-357,1995年..
- 14) Taris,T.W.,Peeters,M.C.W.,LeBlanc,P.M., Schreurs,P.J..G., & Schaufeli,W.B. : From inequity to burnout:The role of job stress. *Journal of Occupational Health Psychology*, 6,303-323,2001年.

Abstract

The purpose of this research was to develop two scales: (1) for measuring anger and (2) for measuring anger coping behavior, and to examine the relationship between the level of anger and anger coping behavior of elementary school teachers using these scales. In Study 1, the reliability and validity of the first scale was examined in 392 elementary school teachers (141 men, 251 women). Results of factor analysis indicated that the 30-item scale consisted of three factors (Speech and Behavior of Children, Speech and Behavior of Colleagues and Parents, and Busy at Work). The Scale had a high degree of reliability and validity. In Study 2, the same teachers participated in developing a scale of anger coping behavior. Then the relationship between the level of anger and anger coping behavior was analyzed. Results of factor analysis indicated that the second scale with 24 items consisted of six factors (Consultation, Attacking the child, Relaxation, Repression, Family Attack and Self-Solution). Moreover, the Anger Coping Scale had high reliability and validity. An analysis variance on the relationship between the level of anger and anger coping in elementary school teachers indicated that higher the level of anger, the stronger was the tendency for aggressive behavior. This result was independent of the teacher's gender.

Keywords : Elementary School Teachers, Anger, Anger-Coping Behavior, Aggressive Behavior